

W・H・O 主催

児童精神衛生会議に列席して

平井信義



(一)
空路シドニーに着いたのは八月五日の朝であったが、飛行場に降り立つと思わずみぶるいがする程寒かつた。

早春といっても、まだ木の芽の固い大学の寮に移ったのは八月十日で、その日十七ヶ国から六十五名の代表が参集した。小児科医はもとより、精神科医、心理学者、教育家、児童相談所関係の役人、ケース、ワーカー、それに英国から文化人類学者を混えて、各分野から児童の、それも七才以下の子供を対象として検討が加えられた。

会は九時から始められた。一時間は主題に関する講義があり、その後は六班に分かれて、各国状に基づき討議が昼すぎまで加えられた。二時から一時間の講義に引続いて再び討議が行われ、夕方約一時間ほど主題に関係深い映画が上映されて終るのが、大休日課であった。

同じ寮に在るから、朝夕のお茶の時間にも食事の時間にも等しく顔を合わせることになる。討議会で討議し尽されないことは、その時に持越されることさえあった。総各班には互選したまとめ役があり、その人たちが討議内容を持寄って結論を出す。その結論に関する討議会が三日に一度夜の八時から十時すぎまで続けられることさえあって、総てが始めての経験であり、会話に慣れない私は初めの一週間は非常に疲労した。しかし私の班の学者たちはみな親切で、討議に熱がのって話し方が早くなると、「ドクターひらいがいるからもっとゆっくり話そう」と注意し合ってくれた。

(二)

シドニーの飛行場についたとき、取囲まれた新聞記者から第一に聞かれたことは、原子爆弾が落ちた当時母親の胎内にいた子供のその後の發育は如何ということであった。原爆研究所の報告では今までのところ大きな影響がないという。私はそれを答えた。第二回は

「日本の幼児の教育であなたに一番大きな問題は何か」という質問であった。私のまわらぬ口をつけて出た言葉は意外にも「年寄り」であった。興味をもった記者たちは、盛んにその理由をききにかかった。私は日本の非常に多くの家庭では都鄙ともに年寄りが一緒に生活し、経済的或いは教育的に強い影響力を持っていること、総領を可愛がり次子以下を軽視し、それが両方の子供たちの性質をゆがめてしまうことを述べた。「グランマ（祖母）が不良少年を作る」という大きな見出しでそれが翌日の新聞に載って、それに関するアメリカや濠洲の学者たちの意見が続いていた。

ドクターひらい、といえばグランマということになって、会議の途中にもしばしばこの問題が取上げられた。それは「家庭の中で誰が子供に対する権威者か」「東西の異った文化形態の中で、子供はどのようにしつけられているか」という問題が三日間に亘って討議された際に問題となったことであった。

東西が如何に異った文化形態をとっていることか、——今度の会議で私の得た最大の収穫はこれであった。日本の家庭のあり方が英米の人々には理解できないらしく、私の家庭が十一人であるという、一体誰と誰とが住むのか、室の間取はどうか、いさかいはないのか、などの質問が出た。そして、両親以外の者が——例えば祖父母とか父の弟妹たちが子供の養育に大きな役割を持つことが、子供の社会性に意義があることだろりときかれもした。

おちぎの仕方問題となった。日本ではどのようなおちぎの仕方をするか、幼稚園で先生と子供の間はどうかなどきかれたので、どの家庭でも朝先生に会ったときに、ていねいにおちぎをするように

しつけていると話したら、みな不思議そうな顔をした。私は日本には「三尺下って師の影を踏まず」という諺があると話をしたら、「太陽がくるくる廻るときにはどうするのか」などとひやかされてしまった。

欧米濠の人々のおしゃべりのひどいのは驚いた。と同時に会話の下手な私には食べ物をおちおちできないほど苦痛であった。話しかけられるとおいしいラム（竹羊の肉）も喉を通らない。そこで一計を案じて、我々は小さいときから「食事のときは黙って食べるように云われ、子供たちにもそう教えているから」と口止めしようとした。ところが彼らは俄然その問題に興味を示して、その理由如何子供の祝日にもそう戒めるのか、日本へ帰ってからあなたはどのようにと思うか、など次々の質問に、私は茫然としてしまった。

文化人類学者フアース教授は、檉の木一本でさえも東西では異りそれからうける印象もちがうことを述べられた。ましてホームに於ての考え方、子供が父母をみる見方、両親が子供をみる見方、延いては大人が子供をみる見方が非常に異っているのではないか、と思いはじめた。従って文化形態のちがう国の教育理論やしつけの方法をそのまま直輸入して宣伝している人が日本の学者の中には案外多くことにその人たちが実際に子供たちに接触して吟味することなしで発表しているような場合には、ずい分危険なことではないかしらとしみじみ思った。

(三)

「母性愛」の問題は非常に大きく取上げられた。中でも母親及び母親に代る者がなしに育てられている子供、——例えば乳児院やそ

の他の施設に収容されている子供たちが、如何に性質の上のゆがみを持ってしまふか、しかも施設に入る年数が少ければ少い程弊害が多いか、或いは病院に入院する際にさえも母親から離すことは弊害があることが執拗にのべられた。最良の施設であっても、悪い家庭よりも劣るという結論であった。従つて欧米では里親制度に切替えているし、病院に入院する際にも母親をつけるように努力しているという。

私には第一に疑問に思えたのは、最良の施設であるのに、それがどうして子供によくない影響を持つつかという問題であった。少くとも一才未満の子供である限り、我々の乳児院の子供たちは、入院中特別の問題を持たないし、退院していけば普通人と何ら変りがないことがわかつている。他の乳児院でも次第に問題が少くなつてきているという。

ところが、施設は恐らく遙かに完備している英米で、どうしてこのような問題が起るのであろうか。私の意見を求められたとき、私は保育者の性質の問題だと言ひ切つた。殊に施設で子供に接するものは大部分女性であるから、その女性の性質がどうか、という問題が一層大きい。私には欧米の保育者を知らないから比較の限りではないが、日本の保育者が子供に接触するその仕方が、非常に多くもあり、身近なものではないかということである。その一つの証拠として、「皮膚関係」ということが強調された。例えば母親とその子供にしても、もっと皮膚関係を重要視しなければならぬという点である。

我が国の場合には、実は母と子の皮膚関係が濃すぎて困つてい

る。お乳は泣けば与えられ、お誕生をすぎても或いは二た誕生をすぎても与えられることは珍らしくない。或いは畳の上の生活は、多かれ少なかれ添寝をしている。そうした関係は病院に入院した際にも続けられるので、医師や看護婦は治療がしにくくて困る様である。私はその点を強調し、フィリップピンやビルマの代表たちもそれを認めた。しかし、英米の代表たちにはなかなか飲み込めぬらしい。結論として出たことは、日本及び二、三の東洋の諸國をのぞいては病院で母親の附添いをさせることに賛成及び施設収容児を母親のもとに送るということになつてしまつた。

(四)

各国からの代表が、半分以上女性であつたことは、私にとって最大の不幸であつた。女性を尊重する風習になじんでいないので、初めから面喰つてしまつた。お茶のサービスなどはみな男性がする。椅子を探していればもつていく、外套を着ようとしていれば素早くかけてやる、道を歩くときは必ず内側に女性を並ばせる、——こうしたことによく勉強しておかなかつたので、ずい分不しつなこともしてしまつたらう。

見るに見かねてか、私の班のスタング女史といつても五十前後の婦人で廿貫以上ですから御安心下さい——が私に早く西欧の習慣を覚えさせようと、毎晩のように衝へつれ出し、映画にも五・六回いったらう。実は私にはこれが非常に苦痛であつた。瘦せっぽちの私が女史の腕を支えて映画館の階段を上つていく光景は、我ながら哀れな気がした。

特に濠州では妻君を大切にすることが強調された。こうした家庭

の在り方の中で、子供たちはどのような女性観を得、男性観を得ていくであろうか。英米の学者には、我が国の家庭生活の中で何でも夫が先にし、妻が従うという形式は理解できないようであった。今更のように、私は「男女同権のしつけ」ということを考えた。この点でも濠州の学者から、あなたが日本に帰ったら、現在の如き婦随させる態度をかえるか、と吃問された、私は返答に困った。

この問題は、性教育や家庭教育の在り方を規定する重要な因子であるから、私どもはこうした差異がどうして生れたか、これからどのように養えていくべきかを真剣にかんがえなければならぬと思つた。

(五)

その他、妊娠中に母体が受けた影響が、どのように子供に及んでいるか、——この問題で非常に大きな業績を挙げたのは濠州のグレン博士であろう。従来遺伝であるとのみ考えられていた子供の目・耳・心肝などの畸形が、妊娠三ヶ月以内に母親が風疹に犯されたときに起り易いことを発表して、遺伝に対する環境の因るを強調した点にある。

我が国では幸なことに、この病氣は大部分が子供のときにかかるので、殆ど心配がない。当時シドニーではこの病氣の流行があり子供の罹患が多く大人に少いということは不幸中の幸いだと結んであつた。

その他、接取問題や題排尿便のしつけの問題が論議された。異常児や精神薄弱児についても、短時間であつたが、話し合うことが出来た。

(六)

この度の会議に於て最も大きな収穫は、東西の文化が、或いは日本及び諸外国とが非常にちがう、そのちがっている上に育児の問題がのっているということである。我が国にはもっと我が国の国状に基いてしつけなどのカリキュラムが立てられることが大切である。

再び空路マニラを経て東京に帰り着いたのは九月一日。町々を歩きながら、しみじみ感じたことは、何と子供が多いことか、ということであつた。濠州の広大な土地に東京都の人口しか住んでいない。私の滞在中にも新聞の第一面に大きく生めよ殖せよとうたつていた。従つて妊娠中から育児期間を通じて國家の保証が十分行き届いている。一人の最低保証が七千二百円とかきいた。しかも、濠州の人々は大体「二児制」であるという話であつた。

貧しい国、——何と日本は貧しいか——会期中、東洋の諸国が西洋の諸国に較べていかに貧しいことか、總ての文化が貧しさを土台にして出来上つていのではないかと思われるほどであつた。

(お茶の水女子大学助教・愛育研究所員)

×

×

×

×